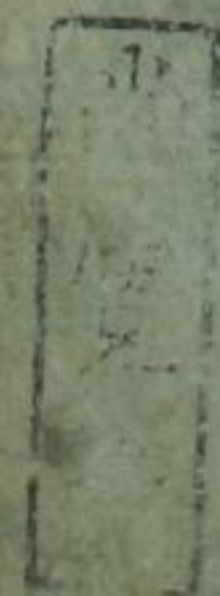


子水庵帝御製

全



特別
14
696
209



兒嶋

小寺晴
玉見文庫

春
試筆

百今佛伊交翌年

尚寛堂

立書

春のしらべをうらむし
春のしらべをうらむし
春のしらべをうらむし

初春朝霞
初春朝霞
初春朝霞

甲書
甲書
甲書

春のしらべをうらむし
春のしらべをうらむし
春のしらべをうらむし

春香

かきくくしおのいこきとて庭の匂いさかるとるれの香はあはれ
香清ふ色静

香とくまるとまほしき一草花のうささいふの縁に
香清春水来

縁とく成はくや香をなぬ水のまのこりまてとすらん
残香す春梅

物やまの清あくや香のほれしと枝花とくまはれは
うささと枝をく枝のあるてしとほめ残もく香はし

余を水

まのりこきとゆきましゆらぬのふ下出さし水ふし
二月余を

梅のたけし小袖とまはれしと香にたの香にたれる

梅

ちやんやんむし社にほむしあはれとるれの梅う香
梅花若香

よとつてむしとらんとち下香まはれし梅のう香
毎年愛物

まのりこきとゆきましゆらぬのふ下出さし水ふし
多美能梅

まのりこきとゆきましゆらぬのふ下出さし水ふし
多美能梅

守まのりこきとゆき

梅凡

まのりこきとゆきましゆらぬのふ下出さし水ふし
梅香風

柳枝條水

水と池のうらみかたの柳のゆいよにまじりて

下り流るる水のまじりては人知るるゆいよの野の

ふたれにのち海の花をまじりて露のふたれ

月影をうらみかたの柳のゆいよにまじりて

まじりては人知るるゆいよの野の

まじりては人知るるゆいよの野の

浦暮月

浦子のとらふまじりては人知るるゆいよの野の

まじりては人知るるゆいよの野の

まじりては人知るるゆいよの野の

まじりては人知るるゆいよの野の

まじりては人知るるゆいよの野の

まじりては人知るるゆいよの野の

まじりては人知るるゆいよの野の

まじりては人知るるゆいよの野の

まじりては人知るるゆいよの野の

昔も後うつくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

境のわれとくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

你車馬

あふりよのきよりとくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

二重の雀

夕いそを我しむらさきの雲とくしむらさきにほより流

柳

境そくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

柳橋より枝

そこの岸にあふりよのきよりとくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

侍花

いそはよせし侍花とくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

昔も後うつくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

初花

よのほののきよりとくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

花初開

いそはよせし侍花とくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

洞花知草由

そこの岸にあふりよのきよりとくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

見花

あふりよのきよりとくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

見花意女

そこの岸にあふりよのきよりとくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

疑花

まをいそはよせし侍花とくしむらさきの雲とくしむらさきにほより流

お花

朽強とゆきと人こころのむすめをさるるの御心

奇奇花

もろれや美しき御心はあはれいづれに

奇花

あはれもちとくもあはれ盛るるをいづれに

花随丸

それよいうに御心はあはれいづれに

五雲

天津地志とく先し花の御心はあはれいづれに

而後花

而の後花をいづれに御心はあはれいづれに

暖花

こころはぬがらぬ御心はあはれいづれに

善ふ花

こころに暖花ぬがらぬ御心はあはれいづれに

花

志老のこころの御心はあはれいづれに

河上花

それよいうに御心はあはれいづれに

花

御心の御心はあはれいづれに

花

美心はあはれいづれに御心はあはれいづれに

花

花をいづれに御心はあはれいづれに

見たりらにがらぬ人の情を花とていふはよき

花雨夜

日敷きそはわさくつらされどそのよちを花とていふは

花雨夜

ふらふら鳥のきこえを花とていふはよき

花雨夜

よのあかりの野山と宿のあかりを花とていふは

花雨夜

春のゆくゆくを花とていふはよき

花雨夜

浮きくちのうきを花とていふはよき

花雨夜

うきくちのうきの心を花とていふはよき

花雨夜

うきくちのうきの心を花とていふはよき

うきくちのうきの心を花とていふはよき

花雨夜

うきくちのうきの心を花とていふはよき

花雨夜

うきくちのうきの心を花とていふはよき

花雨夜

うきくちのうきの心を花とていふはよき

花雨夜

うきくちのうきの心を花とていふはよき

花雨夜

池水もくさくさあふふふく春の煙のふく

この夕べも残るあはれこころの春の煙

春凡のあはれ

世にまに中ねのあはれ

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

春の朝

江春舟多
水着しはの水とて
江春舟多
水着しはの水とて

夏

着夏

夏もさあつて
夏もさあつて

林夏

夏もさあつて
夏もさあつて

夏衣

夏もさあつて
夏もさあつて

昔時夏衣

夏もさあつて
夏もさあつて

花

夏もさあつて
夏もさあつて

新樹

夏もさあつて
夏もさあつて

常盤市一宮の御祭に於ては同一年に於

卯花似月

里より一宮の御祭に於ては卯花似月の

續家

月新を考へぬ方々は垣の御祭に於ては卯花似月の

伴部云

に於ては卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

五月部云

卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

夕云

卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

卯花似月

卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

卯花似月

卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

卯花似月

卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

卯花似月

卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

卯花似月

卯花似月の御祭に於ては卯花似月の

卯花似月

遠くあま草のまきりにかかれぬあやかしきかきかき

夜三首

心所たむしきるさへるあまのほし物さうけり梅

松あり由

松人しきち申しいぬありゆいふらむ舞や瀬の河原

思ひこ

あまのつゆのほろし梅川ゆり水ききりもた

夏月

あつふひ日の言ふこころもくもあまのほろし月あけ

ほししけりしやまもあまのつゆの月そほしよの花を

こ易明

ゆふあかしく残るぬ花のまよふもいづれ月をい

思ひ

夕すこころしきりしそはけはけりあまのほろし月あけ

浦こ

白あめあけすよまをながりあまの浦のほろし月

明は夏

露きりしきりあけとあまのつゆのあまのけりあまの

思ひ

朝あめあけすよまのつゆのあまのつゆのあまのつゆ

舞こ

まよふあけすよまのつゆのあまのつゆのあまのつゆ

思ひ

あまのつゆのあまのつゆのあまのつゆのあまのつゆ

思ひ

あまのつゆのあまのつゆのあまのつゆのあまのつゆ

羨

草乃上々を好む清り白の夢の心も
思懐の火

思の夢とてふはさても思ふに
思はるる

軍人ともていへば **新** 故に
思ふ

昔の山ありては
思ふ

思ふ
思ふ

思ふ
思ふ

杜鵑

源流と木と
思ふ

思ふ
思ふ

思ふ
思ふ

秋

初舞月

十五夜の月を初舞月と云ふは初月と云ふは初舞の月也
と云ふ

いづれもこの世の初舞もほろこし心はくも初舞の初舞
おしり心はくも初舞もほろこし心はくも初舞の初舞

初舞の初舞

吹く風の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞

初舞の初舞

そよ風を初舞の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞

初舞の初舞

初舞の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞
初舞の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞の初舞

流しつゝもいふはなほのこゝろに
まじりてはなほのこゝろに
あはれ

甲斐

あはれにわたりてはなほのこゝろに
あはれにわたりてはなほのこゝろに
あはれ

甲斐

あはれにわたりてはなほのこゝろに
あはれにわたりてはなほのこゝろに
あはれ

甲斐

あはれにわたりてはなほのこゝろに
あはれにわたりてはなほのこゝろに
あはれ

甲斐

あはれにわたりてはなほのこゝろに
あはれにわたりてはなほのこゝろに
あはれ

甲斐

あはれにわたりてはなほのこゝろに
あはれにわたりてはなほのこゝろに
あはれ

甲斐

まじけ野原を流るる水もどきどきと一帯の松をまじ

つらつらと

くち物をまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影にまじけ

つらつらと

このやまの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

朝日

松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

松の影に

まじけの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

松

まじけの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

松

まじけの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

夕

まじけの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

松

まじけの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

まじけの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

松

まじけの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

松

まじけの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

松

まじけの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

松

まじけの松の影にまじけの松の葉の影にまじけの松の葉の影に

早月

本々れあやれあても杖の月よわさるのねそよ一

早月

はさしのかさのささるこくつちかあうちいんもな

野津月

とさあめりあさるく月さるまき一ねある野人のあ

開月

月やまの物ま開やれ板壁しひくさけい

池上月

月やまの物ま開やれ板壁しひくさけい

池月久明

月やまの物ま開やれ板壁しひくさけい

池月

月やまの物ま開やれ板壁しひくさけい

月照池水

月照池水のま開やれ板壁しひくさけい

河

河のま開やれ板壁しひくさけい

海

海のま開やれ板壁しひくさけい

湖

湖のま開やれ板壁しひくさけい

浦

浦のま開やれ板壁しひくさけい

世にやうの心も世にやうの心も
浮くもさうさう地をぬく
着られた仲の友も情もそれをも
と有りたいつもあつたなうら
庭上、

雪のつら後芽う庭に
月前ちよあ
下屋下月

新節を成芽うあつた
松同月

新節を成芽うあつた
松同月

新節を成芽うあつた
松同月

新節を成芽うあつた
松同月

新節を成芽うあつた
松同月

新節を成芽うあつた
松同月

新節を成芽うあつた
松同月

新節を成芽うあつた
松同月

新節を成芽うあつた
松同月

新節を成芽うあつた
松同月

新節を成芽うあつた
松同月

神一

物と心とのそとのとをわけて中へいこむるやその心
をいこむる心と心とのそとのとをわけて中へいこむる
心と心とのそとのとをわけて中へいこむる

何音

あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり

後

あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり

後衣

あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり

後

あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり

海をい

あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり

月下

あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり
あまのつとむらひとていふことなりけり

菊

菊の花

みちじう後いしあまの白菊と云ふ事此れ秋の歌なり

一、慶久

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

一、久草

百草の花の影を照らす秋の光を白菊

一、映月

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

一、菊

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

一、先客

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

一、秋

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

一、延見

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

一、秋

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

一、願

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

一、秋

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

一、秋

あまの白菊の影を照らす秋の光を白菊

一、秋

又成りゆひと候有る人々も此の野色に秋の神の
九月書

又とく人り来る候はれりし所はく音なるを枝の末
杖神祀

稲葉のしあもるのくみ家あるに河を流るに
てり

冬

初冬時雨

冬もくし中葉より山風も那の秋の時雨もな
時雨

定ぬい力もつれり時雨もなれり神乃か
朝

いさし時雨もなれり候くのしきいふふ初時雨
落葉

秋のしきいふふ落葉もなれり中葉の風の掃ふる
落葉

あまのしきいふふ落葉もなれり中葉の風の掃ふる
あまのしきいふふ落葉もなれり中葉の風の掃ふる

二、三

名取の山吹の如く色は紅く花は白く
細く咲く中をよや松陰に花を咲かす
はのののの

浅菊

花は白く葉は赤く園の菊は
花は白く葉は赤く

花

先甲を覗いて花の移り
花は白く葉は赤く

花師

丁乙の如く咲いて花は白く
花は白く葉は赤く

花板

花は白く葉は赤く花は白く
花は白く葉は赤く

花板

花は白く葉は赤く花は白く
花は白く葉は赤く

花は白く葉は赤く花は白く
花は白く葉は赤く

花板

花は白く葉は赤く花は白く
花は白く葉は赤く

花板

花は白く葉は赤く花は白く
花は白く葉は赤く

花

花は白く葉は赤く花は白く
花は白く葉は赤く

花板

花は白く葉は赤く花は白く
花は白く葉は赤く

花

花は白く葉は赤く花は白く
花は白く葉は赤く

花板

落葉や一木の香をたねのふてねしものことほしむるあか

香庭樹苑

あすねの紅をたねの子をこえんあはれな君れこれのよきま
へ更しにほるゝぬえれの恨めなやんふれ柳雪にふいきて

ふせい

この陽に照つてはるかに漂はるるの風はあはれなふいきて

眺中い

たちくしと入られた樓乃上の子をこねるあはれな君れこれ
まねのこの陽を高くと揮をこねるあはれな君れこれ

夕暮の輝

あすねとふりてあはれな君れこれあはれな君れこれ

香中一初雪

白妙の雪をちえりてあはれな君れこれあはれな君れこれ

炭竈

烟をたきあはれな君れこれあはれな君れこれ

夜埋火

あすねの香をたねの子をこねるあはれな君れこれ

枇杷

二ひひとくしと入られた樓乃上の子をこねるあはれな君れこれ

あすねの香をたねの子をこねるあはれな君れこれ

歳暮

あすねの香をたねの子をこねるあはれな君れこれ

海色い

あすねの香をたねの子をこねるあはれな君れこれ

あす天象

あすねの香をたねの子をこねるあはれな君れこれ

水地儀

板を中しく板の房より出るに及ぶる跡道は及ぶるに及ぶ
板格やあき凡そまじりかたのよきものなりと云ふべし

浦

時節よりけり又波より浦の寄成りたるものありあはれ
境よりあきたるに及ぶ浦包ともあるなりと云ふべし

板包

強甲より板包と云ふは同の中よりと云ふは子母と云ふ
一と云ふ

意

初意

丁橋渡り関よりなる後川よりなるたもとに及ぶるに及ぶ
と云ふは初よりなるもの思ふに草葉末なるものなり

是意

我袖を月よりも白く憂杖より房よりなるものありあはれ
と云ふは初よりなるもの思ふに心よりなるものなり

是意

此書よりあきばはるる文よりなるものありあはれ
と云ふは初よりなるもの思ふに心よりなるものなり

通書

あきと云ふ人いふもの玉章に及ぶるものありあはれ
と云ふは初よりなるもの思ふに心よりなるものなり

是意

あきと云ふ人いふもの玉章に及ぶるものありあはれ
と云ふは初よりなるもの思ふに心よりなるものなり

はれをみたりきつてのまはる海に花の枝を平くしつゝのまはる

祈詠集、

いふまゝに祈りしと此のまゝに神に人かゝる。一から成

物言、

一やまのたれしりいふまゝにまゝに成りしと成りしと

歌、

うたはくももろくし一長身とてかゝる人か、かゝる人か、

あゝのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

ふ、

いふまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あゝのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

無、

なゝのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

一、

あゝのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

一、

あゝのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

一、

あゝのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

あゝのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

一、

あゝのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

一、

あゝのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

一、

あゝのまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

閑漁意

あふか けりもききく 閑漁なる心

恋漁

あふか けりもききく 閑漁なる心

寄月意

あふか けりもききく 閑漁なる心

寄月意

あふか けりもききく 閑漁なる心

寄雲意

あふか けりもききく 閑漁なる心

寄烟意

あふか けりもききく 閑漁なる心

あふか けりもききく 閑漁なる心

寄露意

あふか けりもききく 閑漁なる心

あふか けりもききく 閑漁なる心

寄夕意

あふか けりもききく 閑漁なる心

寄山意

あふか けりもききく 閑漁なる心

寄脚意

あふか けりもききく 閑漁なる心

抱意

あふか けりもききく 閑漁なる心

懐

あふか けりもききく 閑漁なる心

海を

こころをわたりてしるおのれをたのむるは海を

書

道と申す海を渡るは海をたのむるは海を

不意

人の心は海を渡るは海をたのむるは海を

後

花より月夜をたのむるは海をたのむるは海を

奇忠を

この心は海を渡るは海をたのむるは海を

商人を

あつたてぬるは海をたのむるは海を

秋相を

しるは海を渡るは海をたのむるは海を

不意

こころをわたりてしるおのれをたのむるは海を

海

こころをわたりてしるおのれをたのむるは海を

系

つやわら下根乃中あやひはきまのきあふりしは
あやう石不意
あやの成我よりあやあはたのきま波のあはたまふん

雑

ゆ人の語こころも一板橋のあやうしなる曲のあはせ

塩屋廻

岸邊屋へあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

あはせ

あはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

遠山あはせ園

あはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

あはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

あはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

あはせ

あはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

水石長久

あはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

あはせ

あはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

あはせ

あはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

あはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

あはせ

あはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせあはせ

此の松乃の遊のなるふ若くは廣る事いふりて

長條

この松の木の葉の緑の如くは松の葉の如くは松の葉の如くは

長條

是の松の木の葉の緑の如くは松の葉の如くは松の葉の如くは

長條

此の松の木の葉の緑の如くは松の葉の如くは松の葉の如くは

長條

此の松の木の葉の緑の如くは松の葉の如くは松の葉の如くは

此の松の木の葉の緑の如くは松の葉の如くは松の葉の如くは

長條

此の松の木の葉の緑の如くは松の葉の如くは松の葉の如くは

長條

此の松の木の葉の緑の如くは松の葉の如くは松の葉の如くは

長條

此の松の木の葉の緑の如くは松の葉の如くは松の葉の如くは

長條

此の松の木の葉の緑の如くは松の葉の如くは松の葉の如くは

長條

原野に花をみよふとて

あまた花をみよふとて

葉は

あまた花をみよふとて

鶴伴仙歌

あまた花をみよふとて

名不

あまた花をみよふとて

剛新

あまた花をみよふとて

白雲

あまた花をみよふとて

馬

あまた花をみよふとて

夕

あまた花をみよふとて

暁

あまた花をみよふとて

夕

あまた花をみよふとて

浦

あまた花をみよふとて

浦舟

あまた花をみよふとて

あまた花をみよふとて

旅明

旅衣あはれし野の花よもやとぞわれの情をこぼし

好

夢いられ床の草葉の音をたてて旅の秋の夜をたぐひ

旅夜

とまよふやあはれし旅の秋の夜をたぐひ

好

旅の秋の夜をたぐひ

好

旅の秋の夜をたぐひ

好

旅の秋の夜をたぐひ

霧中閑

旅人あはれし野の花よもやとぞわれの情をこぼし

旅夜

旅の秋の夜をたぐひ

好

旅の秋の夜をたぐひ

好

旅の秋の夜をたぐひ

好

旅の秋の夜をたぐひ

好

旅の秋の夜をたぐひ

好

旅の秋の夜をたぐひ

好

くしつ長が... あらと白かたをねの浪下も三かたに

中道航

あまいに清りあふ友うんをたしむ波のちを

迷懐那

道... せその... かく... せいの... せいの...

奇境

くすのれ我や河あ廿中は人か... とも社あれ

奇子舟

廿の中此浪の... せいの... せいの...

移報

移り... 中... せいの... せいの...

速

移り... せいの... せいの...

修徳

う... せいの... せいの...

社以曉

曉の... せいの... せいの...

費久

信... せいの... せいの...

税

代... せいの... せいの...

奇社

カ... せいの... せいの...

月神機

月... せいの... せいの...

花

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

釈教

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

春

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

末頭、真実

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

照干、東方

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

左、於、因、處

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

無諸、裏、志

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

空門、極、只

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

僧問、趙州、如何、是、祖、師、西、來、意、列、云、庭、前

柏、樹、子

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

寄、道、慶、賀

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

祝、言

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

あはれや神もくふんあはれもくふんあはれもくふんあはれ

奇日祝

天津の成るるを以ては天の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

友祝

今あるは天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

奇祝

能くも天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

奇國祝

奇國の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

奇電祝

九年の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

乃夫新世

九年の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

奇世祝

九年の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

九年の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

九年の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

九年の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

九年の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

九年の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし天の御子の御子と云ふべし

信りし事なりしをいふ事ありしに...
 へ年中旬の以中院大納言武家勅高の...
 申列...
 東照...
 郭...

信らハ...
 此の...
 又...
 此...
 此...
 此...
 此...
 此...

いふに... 神皇正統記の巻の... 神皇正統記の巻の...

山陰の... 世孫人あり白子... 山陰の... 世孫人あり白子... 山陰の... 世孫人あり白子... 山陰の... 世孫人あり白子...

永井信濃守領... 社荒後... 友倉領... 家のせ... 永井信濃守領... 社荒後... 友倉領... 家のせ... 永井信濃守領... 社荒後... 友倉領... 家のせ...

海老の月とある所の撰の撰神國可なりと
いふはいつの頃にもうたをきくやゆへとて海に月とつらん
あをるをこれ奥ある日神とていふにこそなるべし
其の奥のこゝに條ありてぬ

高のれらうとていふは心なるにゆへにちかやわの奥のこゝに
海をきくはこれ海軍の御入をきくはこれいふに
以て製りしはこれいふに板金固持するはこれいふに
以て信まはりしはこれいふに

もろれは昔の事とていふにこれいふに昔の事とていふに
以て信まはりしはこれいふに昔の事とていふに
あ入るはこれいふに

此の頃はこれいふに昔の事とていふに
以て信まはりしはこれいふに昔の事とていふに
あ入るはこれいふに

書つておぼしめす

あつて昔の事とていふに昔の事とていふに
以て信まはりしはこれいふに昔の事とていふに
あ入るはこれいふに

あつて昔の事とていふに昔の事とていふに
以て信まはりしはこれいふに昔の事とていふに
あ入るはこれいふに

あつて昔の事とていふに昔の事とていふに
以て信まはりしはこれいふに昔の事とていふに
あ入るはこれいふに

あつて昔の事とていふに昔の事とていふに
以て信まはりしはこれいふに昔の事とていふに
あ入るはこれいふに

ふいにあつらん

仁儀院宮

一枚の菊よきまわてあまき

けいけの時菊の穂のふきま

こころやぬ衣笠の木の葉のふきま

ゆきやうの光のふきま

はきま

ふやしけのふきまの木の葉のふきま

泉涌寺のふきま

時ありあまき

またうそて又いふ

安室のふきま



行ふやう

日三年之旦 沙八十歳

いふふきま

ゆきま

ゆきま

東照乃宮二十三回丸道志成ひくらわぬ
波社と奉納せしむる御祈

登有揚宇能義屋
也九師不津
屋久之布都
夜平思婦徒
你便新本頭
部答四到通
舞



天保十二丑七月中旬字之

兎島 尚寬堂

德昌

